新版地球進化論

松井孝典　著

われわれは，あまりにも悠久な時間と広大な空間を持った，というのが本書を読み終わったときの感想の柱となることであろう。ビッグバンとして知られる宇宙開闢以来100億年，知りうる最も遠い天体までの距離数十億光年。あまりにも悠久，あまりにも広大ではある。

昔から「動かざること大地の如し」と，変化のないものの代名詞のように扱われてきた大地（地球）も悠久の年月のなかでは，掌に乗せられたおしんこ細工のように自在に変形していくさまを，科学的根拠のもとに次々に提示されると，知的興奮をおぼえるほどである。例えば基本となる地球の年齢について，つぎのような記述がある。「それでは地球の年齢はどのように定義したらよいのだろうか。地球上で現在知られている最古の岩石の年齢は38億年である。だから地球の年齢が38億年かというとそう簡単なことではない。それでは地球の年齢というのはどう推定したらよいのだろうか。実は隕石の年齢を用いて推定するのである。」（本書p.118）ではその隕石は？　といえば，４つある鉛の同位体を用いて決める。中生代に跋扈していた恐竜を絶滅させた原因となったという巨大な隕石をはじめ,日夜地球に飛び込んでくる隕石が「地球の年齢を科学的に知るために一役買っている」などとは面白い話ではないか。

本書はこのような話題をもりこみつつ，217ページの冊子を次の各章に記述している。

１.太陽系ができるまで
２.太陽系をめぐる
３.地球はどんな惑星か
４.地球の年齢を求める
５.地球の誕生のころ
６.生命をはぐくむ惑星へ
７.微妙なバランス
８.地球の未来

上に地球の年代を隕石から推定できるとの記述を転載させていただいたが，本書の題名が進化「論」となっていることからもわかるとおり，教科書のようにあらゆる角度から評価の定まっている事柄を羅列したものと異なり，著者の物理・化学その他あらゆる事象に通暁された豊富な蘊蓄を縦横に駆使して明晰に書き進められた本書は，読んでいてもテンポ良く心地よい感じがする。ご一読をお薦めしたい。

最近すぐ役に立つこと，あるいはもっと露骨にすぐかねになるもの，が喜ばれる風潮があるようである。サブプライムローンの破綻，リーマンブラザーズの没落などを契機に世界中を席巻する経済危機の大波も，もとのもとをただせばこんなところにもあるのではなかろうか。

無用の用ということばがあるが，地球の年齢が38億年であること，その38億年をどのように推定するかということなどを知ったとて一銭になるものでもない。しかしTVで放映される非正規労働者の方々の困窮ぶりと，それにはさまれてたまに放映される，セーフティーネットの張り巡らされた北欧の人々の余裕ぶりを見比べると，われわれはあまりにもすぐ役に立つものばかり追い求めていたのではないかと思う。

（岩波現代文庫，217頁，945円）（芦田守道）